

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

歴史総合

歴史的事象の本質に迫る「問い」で、

多面的な見方と未来を志向する力を養う

茨城県・私立東洋大学附属牛久中学校・高校 **本保泰良**

本時の概要

〔対象〕教科／科目 1年生／地理歴史／歴史総合 〔分野・単元〕第2次世界大戦と太平洋戦争（全2時間のうちの2時間目。P.45に単元の指導計画を掲載）
〔育成を目指す資質・能力〕知識、技能、思考力、表現力、主体性、協働性
〔学習内容〕「なぜ、アメリカは日本に原子爆弾を投下したのか」を本時の課題として提示し、まず、サイパン島の陥落や、戦後の米ソ関係などの歴史的事実を、生徒に問いかけながら確認した。それを踏まえて課題を個人で考えた後、グループで議論した上で、生徒は考えをワークシートにまとめた。

主 主体的な学び
対 対話的な学び
深 深い学び

11:55 前時の復習と、本時の課題の提示



本保先生は、前時の課題「なぜ、ドイツは戦争（第2次世界大戦）を開始したのか」を簡潔に振り返り、本時の課題「なぜ、アメリカは日本に原子爆弾を投下したのか」を提示。「一般的には、アメリカ国民を守るためとされているが、別の見方もあるのではないかと、生徒に問いかけた。

12:18 「原爆投下」までの事実の確認



サイパン島の陥落後の情勢について、本保先生が問いかけ、生徒がそれに答える形で事実を確認していった。「なぜ、東京大空襲は3月だったのか」「なぜ、大本営発表は被害を過小に伝えたのか」「国民の立場ならどう感じるか」などと、生徒が様々な立場から考えられるような問いを投げかけた。

ほんぼ・たいら 教職歴23年。同校に赴任して24年目。進路指導部。地理歴史・公民科。著書に、『書いて深める日本史 思考して表現する記述問題集』（山川出版社）。

学校概要

◎「諸学の基礎は哲学にあり」「独立自活」「知徳兼全」を建学の精神とする。グローバル人材の育成を目指し、「総合的な探究の時間」に「哲学」「教養」「国際理解」「キャリア」「課題研究」の5科目から成る「グローバル探究」を独自設定教科として実施している。

◎設立 1964（昭和39）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約590人（高校）

◎2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、北海道大、茨城大、筑波大、千葉大、電気通信大、茨城県立医療大などに22人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、上智大、中央大、東京理科大、東洋大、法政大、明治大、立教大、早稲田大、同志社大などに延べ861人が合格。

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。



12:05 「サイパン島の陥落」の影響を考える



「サイパン島の陥落」の影響について、生徒は個々に考えたことをノートに記入し、それをグループで共有した。その間、本保先生は、教室を回りながら、B29の航続距離や学童疎開の開始などについて説明し、サイパン島の陥落が本土爆撃の契機となり、日本の敗戦につながることに気づかせた。

11:57 「日米開戦」までの事実を確認



「日本にとってアメリカはどんな存在?」「なぜ、日本は北部仏印に進駐した?」などと、本保先生が生徒に問いを投げかけ、「貿易相手」「資源を得るため」などと生徒が答えるやり取りをしながら、課題を考える手がかりとなる、日米開戦までの日本とアメリカの動きを整理した。

本時のキー課題

12:38 グループで議論後、ワークシートに記入



本保先生からのヒントや、インターネットで調べた情報を踏まえて、本時の課題についてグループで議論。生徒はさらに考えを深めて、ワークシートを完成させた。「制限時間内で書く」という方針の下、書き終わっていない生徒も含めて、授業終了時に、全員がワークシートを提出した。

本時のキー課題

12:28 「原爆投下」の理由を個人で考える



生徒は、本時の課題「なぜ、アメリカは日本に原子爆弾を投下したのか」を考え、ワークシート (P.44 図) に記入。本保先生は、「なぜ、ソ連は広島原子爆弾投下後に参戦した?」「冷戦はどの国が争った?」などと問いかけ、生徒が戦後の状況を踏まえて課題を考えられるように促した。

● 私が目指す授業

「過去」を「今」につなげる、「なぜ」を重視した授業に転換

かつての私は、大学入試を意識して、教科書の内容を分かりやすく解説するのがよい授業なのだと考え、実践していました。しかし、授業アンケートで、「先生の授業は分かりやすいけれど、テストでは点数が取れない」といった指摘を受け、生徒が歴史的事象が起きた理由などの「本質」を理解できるような授業をしていないことに気づきました。

その頃から、問いを中心にした授業を追究してきました。「なぜ」と問題意識を持つことができれば、生徒は自分の頭で考え、教科書やインターネットで必要な情報を主体的に探します。問いの答えを考え抜くことは、知識の定着につながると同時に、今後の社会でも求められる姿勢を培うことにもなると考えました。

歴史的事象を、「過去」のものとしてだけではなく、「今」につなげ、そこから何が学べるのかを生徒に考えさせることも大切にしています。支配者が民衆を締めつけければ、反撃を受けます。一方、あまりに統制さ

れなければ、民衆はやりたい放題になりません。そうした歴史の教訓を、例えば、自分がリーダーになった時に置き換えて捉えられるようにしています。「歴史総合」が扱う近現代は、現在の国際社会が抱える諸問題と深くかかわっており、生徒が自分の未来を志向する力を養える科目だと考えています。

●私の発問・課題設定の観点

多面的に見る目を養える 授業を貫く課題を設定

現在の授業は、授業を貫く課題を設定し、それを考えるための歴史的事象を生徒に問いかけたり、グループで話し合っって自分の考えを再構築したりする構成にしています。

第2次世界大戦を扱った前時では、「なぜ、ドイツは戦争を開始したのか」を課題にしました。第2次世界大戦の責任はドイツにあるというのが定説です。しかし、ヴェルサイユ条約で厳しい条件をのませてドイツを追い詰めた、イギリスやフランスにも問題があったのではないかといった見方もあります。歴史的事象は、立場によっては、常識や定説とは異なる見方が成り立つということ

を、生徒が実感できる課題にするよう心がけています。

本時の課題とした原子爆弾投下の理由も、アメリカは自国民を守るためとしています。ソ連との対立を視野に、戦後社会での覇権を握るねらいもあったのではないとも言われています。授業の前半で、日米開戦の経緯や、本土爆撃の契機となったサイパン島の陥落による影響など、歴史的事象を整理して、課題について考えられるようにしました。

本時の課題をより深く考えるためには、戦後の米ソ対立を踏まえて、原子爆弾投下の意味を捉えることがポイントとなります。そこで、単元の順序を変えて、第2次世界大戦の前に戦後史を扱いました。

生徒が自ら答えを導けるよう、 問いの形でヒントを提示

授業ではまず、課題について個人で考えさせてから、「アメリカはどの国を意識していた？」などと、考えを深めるヒントとなる問いを投げかけます。次に、グループで各自の考えを共有し、他者の気づきや着眼点を得られるようにしています。それによって、自分の考えを磨いた上

☒ 本時のワークシート（生徒の記入例）

アメリカは、人類史上初めて2発の原子爆弾を、1945（昭和20）年8月6日広島、8月9日長崎にそれぞれ投下した。アメリカはなぜ原子爆弾を投下したのだろうか。戦後の国際社会がどのような対立を軸に展開されていったのかという観点から考えて、文頭・文末に合うように説明しなさい。

<ヒント>

・ソ連は広島に原子爆弾が投下されたのち、日ソ中立条約を無視して対日参戦した。

・戦後の国際社会は、資本主義陣営と共産主義陣営に分かれ、冷戦と呼ばれる対立が起こった。

第二次世界大戦末期には、アメリカは日本に原子爆弾を投下した。これはソ連または共産主義側への見せつけである。また、ソ連は日本が原子爆弾を落とせば、しん間をおらずに北方領土をばらばらにしていくという

目的があったのではないかと考えられる。

本時の課題「アメリカが日本に原子爆弾を投下した理由」について、ソ連に対する威嚇だったという視点を盛り込み、なおかつ北方領土の不法占拠にまで言及した生徒もいた。加筆した箇所があるなど、グループでの話し合いで考えを深めた様子がうかがえる。 ※学校資料をそのまま掲載。

で最終的に自力で答えを出すことができ、生徒の達成感や自己肯定感がより高まると考えています。

課題について自分の考えを記入するワークシート（☒）は、大学入試を見据え、制限時間を意識して書かせ、記入が途中で授業終了時に提出させています。課題のいくつかは定期考査でも出題するので、ワークシートの返却後、自分で答えを完成させるよう、生徒に伝えていきます。模範解答は示していません。課題について主体的に考えようという状況になることを避けるためです。

課題を考えるために必要な歴史的事象は、生徒に問いかけて確認するようにしており、生徒には、予習と

して教科書を読んでもくろくように伝えています。年度当初は、「発言するのは恥ずかしい」、「間違ったらどうしよう」といった気持ちがあるからか、問いかけて答える生徒はほとんどいみせんでした。「少しでもよいから声を出そう」、「間違っても大丈夫。分からないことがあったら質問して」などと声をかけていくことで、次第に生徒は発言するようになり、予習の習慣も定着してきました。今では、クラス全体から、私の問いかけに対して自然と声が上がります。

以前は、設定した課題が漠然としていて、生徒が何を答えてよいか分からなかったり、課題を考えるための知識が足りずに、考えを深められ

現在の授業形態にしてから、生徒が意欲的に授業に取り組むようになってきました。授業アンケートで「歴史の授業が、日本の発展のために何をすべきかを考えるきっかけになった」と回答した生徒もいました。歴史の教訓を人生に生かそうとする生徒の姿を心強く感じています。

● 成果と展望
歴史の教訓を踏まえて、
将来を展望する生徒たち

当初は、1時間の授業の準備に7時間ほどかかっていました。要領が分かってきた今でも、「この課題は、考える意味があるか」と、生徒に聞きながら、試行錯誤を続けています。

なかつたりすることがありました。その経験から、各単元で学ぶべき本質を熟考した上で、生徒が意味のあるものとして自分で考え、答えを導き出せるような課題を設定し、そこから逆算して単元計画を練るようになりました。そして、授業時間内に生徒がゴールにたどり着くよう、教科書を基に、必要な知識や考える視点をまとめたスライド(*)を作成し、それに従って授業を進めています。

定期考査では、「知識・技能」の観点で評価する問題と、「思考・判断・表現」の観点で評価する問題を、均等に出题しています。「思考・判断・表現」の観点で評価する問題は論述式で、どの生徒も、回を重ねることに記述量が増え、自分の言葉で記述できるようになっていきます。

ただ、まだ受け身の生徒が一定数いるのも事実です。生徒一人ひとりの興味を刺激する魅力的な課題を設定し、すべての生徒が前のめりに積極的に発言する授業を実現することが、今後の目標です。未来は誰にも分かりませんが、過去から学ぶことはできます。生徒が歴史から学び、将来を切り開いていく力を育む授業を、これからも模索していきます。

VIEWnext ONLINEでは、本時の授業の様子をダイジェスト動画で紹介!



VIEWnext ONLINE 検索



単元の指導計画

【教科・科目】地理歴史・歴史総合 【分野・単元】第2次世界大戦と太平洋戦争 【テーマ・作品】第2次世界大戦における各国の思惑と、戦後社会を見据えた米ソの動向について 【設定時数】全2時間（本時は2時間目） 【単元目標】歴史を多面的・多角的に理解する力を身につける

時数	学習内容	身につけさせたい 資質・能力	授業の流れ	教師の配慮	評価方法
1	第2次世界大戦	<ul style="list-style-type: none"> 国際連盟発足からわずか20年で世界大戦が起こった理由について、過去の学習内容を参考にして自分の言葉で説明できる。 敵対関係であったドイツとソ連が不可侵条約を結んだ理由を、ドイツ・ソ連それぞれの立場から説明できる。 <p>【知識、技能、思考力、表現力、主体性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> 第1次世界大戦後のドイツの立場を理解した上で、その後のドイツの動きを確認する。 国際連盟とドイツの関係を捉えて、平和な時代が短期間で終わった理由を考える。 ドイツとソ連の関係を概観し、不可侵条約締結から独自開戦の流れを理解する。 アメリカで成立した武器貸与法や大西洋憲章の発表が、戦況にどう影響したかを考える。 	<p>【主体的な学び】・教科書を深く読み込むための補助となるスライドを通じて、考えるように伝える。・生徒が教科書を使って自分の力で考えられるよう、歴史的背景を説明する。</p> <p>【対話的な学び】・1人で考える時間を設け、自分の考えを持ってから、グループディスカッションを行う。・議論が深まっていないグループに、ヒントとなる助言をする。</p> <p>【深い学び】・「第1次世界大戦後の国際社会では、なぜ、平和が長く続かなかったのか」「なぜ、ドイツは独自不可侵条約を結んだのか」という問いを織り交ぜて、思考の深化を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ノートに記述した問いの答え グループディスカッションの参加状況
2	太平洋戦争	<ul style="list-style-type: none"> 日本にとって、アメリカはどのような存在だったのかを、貿易の観点から説明できる。 マリアナ諸島のサイパン島の陥落が、その後の日本に及ぼした影響について説明できる。 アメリカが日本に原子爆弾を投下した理由（仮説）について、戦後社会の展開を踏まえて説明できる。 <p>【知識、技能、思考力、表現力、主体性、協働性】</p>	<ol style="list-style-type: none"> 日本にとって、貿易上、アメリカがどのような存在だったかを考える。 日本の軍事行動に対してアメリカが経済制裁を行う中、日本では戦争に向けた準備と同時に、日米交渉が進められた事実を確認する。 太平洋戦争が始まり、日本が劣勢となる中でのサイパン島の陥落が、何を意味するのかを考える。 アメリカが原子爆弾を投下した理由を、戦後社会と関連させて考える。 ワークシートに取り組む。 	<p>【主体的な学び】・教科書を深く読み込むための補助となるスライドを通じて、考えるように伝える。・生徒が教科書を使って自分の力で考えられるよう、歴史的背景を説明する。</p> <p>【対話的な学び】・1人で考える時間を設け、自分の考えを持ってから、グループディスカッションを行う。・議論が深まっていないグループに、ヒントとなる助言をする。</p> <p>【深い学び】・「なぜ、アメリカは日本に原子爆弾を投下したのか」を最終的な問いとし、そこに至る過程として、日本とアメリカの関係、戦後社会との関連を示して、問いの答えを考えられるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ノートに記述した問いの答え グループディスカッションの参加状況 ワークシート

※本保先生作成の単元の指導計画を基に編集部で作成。

* 本保先生作成の授業スライドは、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』(https://view-next.benesse.jp/) からダウンロードできます。「Top →学校教育情報誌『VIEW next』→高校版バックナンバー」をご覧ください。